

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 11～

## <想像力が働かない>

杉江 太郎

### ～『虐待』という言葉～

虐待という言葉が、メディアなどで頻繁に見られるようになって久しい。昔から虐待という言葉はあったのだろうが、今では、毎日と言って良いほど新聞やネットで耳にするようになった。

毎年、「過去最高」という枕詞とともに、虐待対応件数が報告される。過去最高を更新し続けており、「～年前の〇倍！」という言葉も良くセットで使われている。

虐待という言葉が一般化されたことで、児童相談所は大繁盛である。これは、潜在化していた社会のニーズが新たに発掘されたという意味では、子どもの将来の福祉に繋がる良い結果なのだろう。ただし、これはあくまでも、それを受け止めるだけの土台があつてのことである。

今の政策は、虐待認知件数を増やすという意味では、大いに役立った。実際に件数が増えていることがそれを証明している。一方で、現場にいる私自身は、『虐待』という言葉の弊害を感じている。本当に今の政策が虐待を減らすことに繋がるのかと言われると、誰もそのことに答えることは出来ないだろう。件数のことだけ

を言えば増え続けているのである。

社会の需要が高まると、それに伴って供給が増えるのが一般的である。この20年で、コンビニエンスストアやドラッグストアは激増している。児童福祉の業界ではどうか。現状だけで言うと、件数を増やすことだけで終わってしまっているのではないだろうか。本来ならば、増えた顧客をどう扱っていくのか考えるべきである。件数は増えているという『現実』の中で、虐待を減らさなければいけないという『理想』を掲げることは正直馬鹿げていると私は考える。

### ～想像力を欠如させてしまう～

児童相談所には「虐待を受けている子どもがいます。」という連絡が頻繁に入る。そのような連絡が入ると、児童相談所は調査を開始するのだが、ここで少し考えて欲しいのが、「虐待を受けている子ども」とは一体どのような子どもなのかということである。

みんな決まり文句のように『虐待』という言葉を使用しているが、実際に「虐待を受けている子ども」と一律に言える子ども

もが存在するのだろうか。そもそも『虐待』という言葉は、私は、ただの分類のためのラベルだと考えている。児童相談所で扱う児童を『虐待』か『虐待でないか』と明確に分類することで、国の政策の効果（ここでは、件数を増やすということ）を測定しやすくしている。

しかし、このラベルの使用方法を履き違えてしまうことは、想像力を欠落させてしまう。先ほどの考えでいくと『虐待』という言葉は、あくまでも数を数えるためにわかりやすくするためのラベルである。つまりは大枠しか示さない。ペットボトルのお茶や水にたくさんの種類があり、その中身が軟水なのか硬水なのか、はたまた、宇治茶なのか、ほうじ茶なのかと細かく見れば何が入っているのか示されてはいるが、実際はその大枠であるラベルのみで判断しているように、『虐待』という言葉で示される子どもは、ラベルが貼られた状態であり、その言葉だけでは、一律に判断が出来ないものである。世の中には『虐待』という言葉だけで語れないたくさんの事情を抱えた子どもが存在する。『発達障害』『いじめ』という言葉も同様かもしれない。

そうした流行り言葉を使用することで、わかったような議論を交わすように見てしまうが、その流行り言葉を使用することで、様々な個別性に蓋をしてしまうということも事実である。ワイドショーや、自称専門家の世界ではそのレベルで良い

のかも知れない。しかし、個別のケースに対応する援助職者が、そのような言葉で片づけてしまうことは、想像力が欠如しているとしか言いようがない。個別の事象を考えたときに『虐待』という言葉で語れないことはたくさんある。

### ～想像力の欠如が及ぼす影響～

想像力の欠如については、やはりメディアの発達も影響していると思う。虐待事件が起きるたびに、マスコミは連日その事件を報道する。そこで議論される内容が『児童相談所の怠慢』『連携不足』『お役所仕事』・・・という枠組みを超えることはない。そこには、【被害児童～加害親～救えなかった行政】という構図が出来上がってしまっている。確かに幼い子どもが亡くなったという時点で、その対応を見直されなければいけない。そして次に同じことがないように改める部分は改めなければいけない。しかし、メディアや世の関心はその部分ではなく、いわゆる責任追及、つまり誰が悪ものなのか・・・という点である。実際に、事件のたびに、著名人がコメントをしているが、やはり、先ほどの枠組みを超えることはない。被害児童への同情や、その怒りをどこかにぶつけるためのコメントである。そうやって糾弾するだけで何が変わったのだろうか。

正直、こうやってコメントをする方の大半は素人だと思っている。当然、現場の

ことを知らないので想像力を働かすこともできない。『虐待』＝『かわいそう』という枠から抜けることが出来ていない。そうするとそこで議論が終わってしまう。それ以上の進展は見られないし、現状を打破することも出来ない。そのことで解決できないことを証明しているだけである。本当に社会を変えようと思うのであれば、糾弾するだけで解決しない現実にはアクションを起こさなければいけない。

本当に、児童虐待の現状を知っている人間は、軽はずみに『かわいそう』とは言えないのではないか。自身には直接、関係のない話なのかも知れないが、明日は我が身なのである。同じことがないように最大限の想像力を働かせ、リスク管理をしながら、対応しなければならない。それは、ただ単にかわいそうと同情したり、行政を批判したりするだけで解決しないことを実感しているからこそである。

『虐待』という言葉は、議論するという責任を回避させてしまう。その言葉をあたかも専門家のように使用することの無責任さを考えなければいけない。

### ～想像力を補うために～

想像をすることは日常の中から奪われつつあるのかもしれない。例えば、携帯や、スマートフォンの普及により待ち合わせは格段に効率的になった。SNSのメッセージなどを利用すれば、タイムリーに位置情報を送信し合い、待ち合わせ場所で

出会うことが出来る。

携帯がなかったときは、あらかじめ待ち合わせする場所や時間、乗って行く電車、当日の服装などを確認し、もし待ち合わせ場所にいなかったとしても、「電車が遅れたのか?」「体調不良?」「トイレ?」などとあらゆる可能性を想定しながら、場合によっては館内放送や伝言ボードの利用を検討・・・と、とにかく想像力を働かせなければいけなかった。そこでは相手と自分の性格を念頭に置いて、出会えなかったときの行動パターンや、思考パターンも含めて考える必要があった。

今は、せいぜい「既読」がつかないことに対して、トンネルの中?程度しか想像することはないのでないだろうか。

この仕事は対人援助である。人を相手にしている以上、目の前の人のことについて思考を巡らせる必要がある。どういったニーズがあるのか、どんな気持ちで面接に応じたのかなど想像力を働かせる必要がある。ラベルだけで判断することは浅はかである。まずは、目の前の人に『個人』として興味を持たなければならない。「虐待」という言葉は、『個人』を相対化させてしまう。発達障害や不登校、引きこもりなど、『個人』を相対化させてしまう言葉であふれている。その言葉に惑わされず、想像力を働かせる必要があるのではないだろうか。そのように個人として興味を持った時に、新しい関係に展開する。それは、また次回のお話に。